

Cortical Bone Trajectory (CBT) 法 —理想の軌道がここにある—

谷戸祥之・松川啓太郎 ● 編集

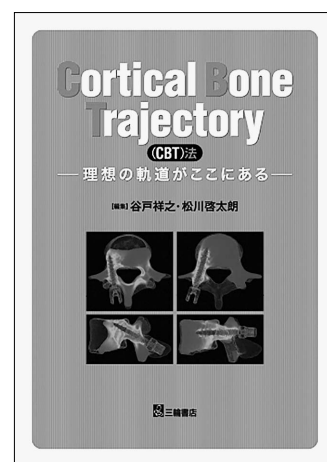
〔評者〕 米延策雄 (滋慶医療科学大学院大学研究科長・教授)

CBT(cortical bone trajectory)法に関する、昨今ではみることが少ないモノグラフである。もちろん、CBT 法がめずらしいのではない。この本の構成である。まず、少数著者の手による。章立ては CBT 法の基礎から臨床(実際)、そして応用となっている。基礎編では、その成立要件となる解剖とバイオメカニクスが著者らのデータに基づいて記載されている。実際編では、術前準備から始まる腰椎 CBT 法の手技がイラストを多用してわかりやすく説明されている。そして、著者らの治療成績が多面的に評価され示されている。多くの経験から得たパールなどが囲み記事としてあるのも読みやすい。さらに、応用編がある。仙椎や胸椎での本法の基礎と実際も多くイラストがあり親切である。多椎間固定や外傷への応用、また salvage としての本法の使い方、さらには現在、大きな問題となっている骨粗鬆椎骨での工夫がそれぞれ基礎と実際に分けて記載されている。

新しい手術手技やそのためのシステムが次々と開発される時代。これに関わる情報の伝わり方も慌ただしい。たとえば、出版、新しい術式について、多数の著者が分

担執筆する雑誌の特集やムック。これらが次々に出され、その速報性は有用なものの、その実際はどうするのか、ピットフォールは、本当に成績はいいのか、といった疑問が少なからず残る。疑問を残したまま、商業主義の勢いに流されて新しい術式に飛びつくのは危うい。他方、新しい術式に従来法にある問題が解決されるのではないかとの期待を抱く。といっても、新しい術式の疑問点を突き詰めようとするとは結構面倒である。また、ぴたりとした答えはなかなか得られない。

著者らもその壁に当たった。R Roy-Camille や AD Steffee らにより開発された椎弓根スクリュー。従来法では成し得ないことを可能にした。しかし、その高みに至れば、それが万能ではないことをわれわれは知る。CBT 法は BG Santoni, RA Hynes らが従来法の欠点を克服するために開発した椎弓根スクリュー刺入法である(2009)。従来法の欠点を補う方法を求めていた著者らは CBT 法に出会う。しかし、その詳細はわからない。そこで、画像の臨床研究を行う。可能性を見いだすが実際がわからない。多くの臨床医はここで止まる。しかし、ここに



光明を見いだした著者らは止まらなかった。学生実習に提供されたご遺体で椎弓根の外科解剖やいくつかの経路のスクリュー強度を明らかにしてゆく。その中で cross trajectory 法も発見している。開発者以上にこれを研究し、副題となる「理想の軌道がここにある」を見いだした。このモノグラムから読み取るべきは CBT 法のそれだけではない。外科医の姿勢である。

B5・140 頁

2016 年

定価：本体 6,800 円＋税

[ISBN978-4-89590-551-0]

三輪書店 刊